短歌のすすめ

現代に生きる
不滅の民衆詩

大野誠夫
馬場あき子
佐佐木幸綱
編

有斐閣選書

日文 701589556

263183

短歌のすすめ

現代に生きる不滅の民衆詩

大野誠夫・馬場あき子・佐佐木幸綱 編

大连外国语学院图书馆
藏书

有斐閣
選書

短歌のすすめ　<有斐閣選書>

昭和50年8月10日　初版第1刷発行
昭和50年12月10日　初版第2刷発行

編者　大野誠夫
　　馬場あき子
　　佐佐木幸綱

発行者　江草忠允

発行所　株式会社有斐閣
東京都千代田区神田神保町2～17
電話東京(264)1311(大代表)
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　三陽社・製本　明泉堂
© 1975, Printed in Japan
大野誠夫・馬場あき子・佐佐木幸綱.
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

はしがき

短歌は日本人なら誰もが作り、たのしむことのできる叙情詩である。たとえ、学問や知識がそれほどなくとも、感情さえあればできる。しかし、いくらやってもこれでよいということはない。奥行きのふかい文学である。行けども行けども果てしがない一本の細い径に似ている。もっとも、誰にでもたやすく到達できるようなものだったら、たちまち倦きられ、とうの昔に滅びていたろう。私たちの遠い祖先は、この三十一音という極めて短い詩型で、何を表現しようとしたのだろう。自然、相聞、羈旅、挽歌……万葉集ひとつを覗いてみても、実にいろいろのことが歌われている。

それらの秀作とか名歌とか呼ばれているものは、どれをとっても、歌われた事柄だけでなく、言外に味わい尽くせないほどの微妙な雰囲気をかたちづくっている。余情、余韻といわれるこの形のない詩的世界は、複雑した色彩と意味に満ちていることが多い。このことは、短歌の機能にかかわる。形は単純だが、さまざまな事柄や、複雑な感情でも表現できる詩型であることを実証しているといってよい。

しかし、また、この長い伝統を背負った詩型は、次第に老化して、時代の進歩に適応しなくなったともいわれてきた。幾度となく繰り返された否定論は、それらの事情を物語る。けれども、こういう滅亡論の起るたびに、ふしぎといってよいほど、新しい歌風が生れている。これは何故だろう。たとえば、複雑な感情や思想を、その複雑さのままで表現することは不可能であるから、やがて滅亡するだろうと

いわれたのは、終戦直後である。それから既に三十年の歳月が経っている。

短歌は滅亡するどころか、作者の人口は年々増加しているようだ。新しいスタイルの才能の豊かな新人をたくさん生みだして、歌壇は隆盛の模様である。また、放恣な自由にようやく倦いたのか、一種のきびしい自己表現をもとめて、この制約のある詩型を敢えて選ぶ傾向も最近顕著になりつつあるという。

本書は、初心者はむろん、これから歌を作ってみようという方の道しるべでありたい。と同時に、もう何年も作歌を続けていながら、更に新しい脱皮を心中に企てている方たちにも役立つようにしたい。そういう念願から、代表的な精鋭の作家を選んで項目別に執筆を依頼し、多様化したきょうの短歌の本質を種々の角度からうかがうことのできるように編集した。

単に、作歌の技術面だけでなく、人間とは何か、文学とは何か、伝統とは何か、そして、日本人とは何かといった根本的な重要な諸問題を考えるいとぐちになることができれば、さいわいである。

繁忙の中を御執筆いただいた各界の諸先生に厚く御礼を申し上げる。

最後に、諸刊行物から抄出、引用した諸作品については、出版社各位の諒解を得ることが最善かも知れないが、解説、評論、紹介などの場合は、その必要がないという世の慣習に従った。寛恕を乞う次第である。

一九七五年五月

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

第1章　現代の短歌——作品と鑑賞　〈I〉

1 自然……宮柊二（2）
2 都会……大野誠夫（16）
3 青春……佐佐木幸綱（25）
4 死……佐佐木幸綱（35）
5 思想と美……武川忠一（46）
6 愛と孤独……武川忠一（53）
7 人と人生……上田三四二（60）
8 病気……上田三四二（69）
9 家庭・家族……山本友一（78）
10 老年……山本友一（89）

11 旅……馬場あき子（99）
12 詩的現実……馬場あき子（108）
13 労働と職場……近藤芳美（118）
14 歴史と社会……近藤芳美（128）

第2章 作歌の基礎知識 〈139〉

1 文学としての短歌……高安国世（140）
2 生活のなかの短歌……高安国世（148）
3 短歌のことばとリズム……前田透（156）
4 発想と素材……島田修二（173）
5 主観と客観……島田修二（180）
6 模倣と独創……稲葉京子（188）
7 連作……稲葉京子（196）

もくじ

8 短歌の歴史……篠弘 (205)

第3章 短歌と私 (223)

1 歌との出会い、作歌の楽しみと苦しみ

● 言葉探しのたのしさ 大西民子 224
● 原初のうた 岡野弘彦 225
● 生甲斐は繰返しのなかに 加藤克巳 226
● 小学生のころ 木俣修 228
● 茗荷の花 葛原妙子 229
● ひとりの歌 窪田章一郎 230
● 歌の海のなかで 五島茂 231
● 父のそだてた花 五島美代子 233
● 記憶 田井安曇 234
● 出逢いの前に 高野公彦 235
● 日々の邂逅 田谷鋭 236
● 稀にだに 塚本邦雄 239

●歌と人生　土岐善麿　240
●未生から死へ　富小路禎子　242
●一九六四年あのほの暗い一室で　福島泰樹　243
●ひとつの異常噴火　前登志夫　245
●子供のころ　前川佐美雄　246
●美しい枷　安永蕗子　247
●『くれなゐ』の歌びと　山中智恵子　248

2 歌の魅力

●そもそもの初めに何が　大岡信　250
●〈歌う〉魅力　金子兜太　252
●歌は禊　黒田了一　254
●白昼の歌人　清水昶　255
●幻の音楽　那珂太郎　257
●いのち　中西進　258
●自分の歌を自分で歌う　秦恒平　261

3 私の愛誦歌

●尽きることのない余韻　井上宗雄　263

もくじ

●わが意識の流れの襞に　笠原伸夫　264
●寂莫とメランコリア　久保田正文　265
●涙でみがかれた宝玉　杉浦明平　267
●愛誦歌一首　竹西寛子　268
●女人の歌　田辺聖子　269
●空穂と光厳院　藤平春男　270
●エピローグなき未青年　松田修　272
●忘れ得ぬ一俳人の一首　吉岡実　273

第4章　作歌相談　大野誠夫〈275〉

1 作歌の心構え（276）
2 才能とは何か（276）
3 中年からの作歌（279）
4 老年からの作歌（280）
5 教養と短歌（281）
6 感動の表現（283）
7 感動と作歌（284）
8 題材の処理（286）
9 寡作家の場合（287）
10 量と質（288）
11 新鮮ということ（289）
12 脱皮について（291）
13 師弟の倫理（293）
14 添削について（295）
15 自信について（297）
16 歌会の心得（298）
17 読むべき古典（300）

第1章　現代の短歌

——作品と鑑賞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　自然

宮　柊二

一　構成から見た自然詠のさまざま

私の師匠の北原白秋先生は、「自然観照我観」とか「自南風擦筆」などいう文章で、没我的自然観照（先生は没我的という言葉は使われなかったが）について詳説された。たとえば「名山大沢に索めずとも、自然の真実相は、そこらの雑木林にも、田川のへりにも、貧しい庭の一部にも公開されてゐる。心して観、心して之を聴くべきである。―自然の恩沢は無尽蔵であり、流通する深奥の生命は、いかなる平凡裡にも脈うつて感じられる。何でもなく見える一小自然が、わたくしには光り輝くばかりに深く、さうして広く感じられる」（「自南風擦筆」）等と。また折口信夫先生は「澆季芸術の上に、情熱の古代的迸出を望むことは出来ない。我々の内的生活を咄嗟に整理統一して、単純化してくれる感激を待ち望むことが出来ないとすれば、もっと内律をひき出す様にする事が、更に歌をよくし、人間としての深みを加へることになる」（「歌の円寂する時」）と説かれた。

先ず自然というものは何か、その自然と人間の関り、さらに自然と人間と歌などについて述べるべきだが、とりあえずそれらは措いて、今の投稿歌壇における自然の歌について小見を述べる。

●没我的自然観照ということ

稲妻の照らす夜空の切れ間にて深きみどりの空寂まれり　　田口良三

海風に枯れすすき鳴りて荒崎の沖あざやかに波が

しら見ゆ　　大森輝子

暮れ早き峡の稲の穂をゆりて吹く風荒く谷ぬけんとす　　西原　瞳

価値ある、没我的自然観照の歌というと、基本的にはこうしたものを指すことになろう。

没我ということは容易に作者の小主観を出さぬこと、観照とはじっと対象を見つめて対象自体の語る声に耳を澄ますことである。ここで白秋の言葉を振り返って貰いたいが、また芭蕉が「松のことは松に習へ。竹のことは竹に習へ」というのも、ここのことを言ったのであろう。そうすることによって、対象のいのちと作者のいのちが通い合うという信頼には、日本人の長い心の歴史が裏にある。また一方、近代的な思潮の色合いがそれに加わってもいるわけである。迢空の言葉をここでも振返って貰いたい。

ここのところを論じてゆくと、さまざまな派生的問題も加わってきて、簡単には片付かないので、以上の概念的な叙述で理解してもらったものとして、話を進めてゆきたい。

右にあげた歌では、作者はその中に姿を現わさない。作者の姿を消したところで、空があり、海がさわぎ、風が荒れているふうである。しかし作者は、自分を消した形で、これらの自然の中に融けこんだ形で、実は一そう強く生きている。迢空の「内律をひき出す」というような調べが歌に響いている。「深きみどりの空寂まれり」と自然を観照してとらえ得た時に、作者は一瞬時の前の自分よりも、一段と深まった、自然を見る自分になっている。

これらに対して、現代は自己主張に急な時代である。むやみに主観が重く見られる、といった弱い時代である（この弱いということには説明が要るが、いま述べてゆく時間がない。ただ一言だけして置けば、多様性の時代と言われるように、種々様々な主観や自我が主張されるけれど、それが他へ権威として存在し得ない、自己の中で主張と行為の統一性を持たないという意）。したがって、右のような没我的な形の自然観照の歌は注目されないようである。また同じ自然の歌でも、海洋とか山嶽とか、深い樹林とか、大きな自然は歌いにくいとも言われる。対象の重みもさることながら、逼塞した時代に生きるという、現代人の時代感情が

そこに作用しているのかも知れない。そして

頬白はなだり埋めたる三椏の花の中にて囀り交す　岡田哲雄

ほの青く障子這ひをり無尽数のかまきり孵るみな鎌もちて　渡辺歳江

のように、又さきに言ったような理由もあって、現代の自然の歌は、こうした植物とか動物とか、それも身近にあるものを題材にした歌が多くなっている。特に戦後は女性の作歌者が増えたということも原因の一つにあろうか。それはいわゆる花鳥諷詠だが、花鳥諷詠と短詩型文学が密接な関りにあることは必然性を持っているし、納得できることでもある。

ただし、花鳥諷詠には、山河や海洋に向うなどより、実は、人間をもっと小市民的な隠逸に誘いこみやすいところがある。

今の歌人達は、そこの陥穽を乗り越えようと方法的には自然詠に主観を導入しようとしているようにも見える。ただし、これは結果から私の想像で、作者本人にとっては無意識で、いわば、今の趨勢なのかも知れない。

●主観的語句によって作者が歌の中に現われる自然詠

夏草となりゆく原かたんぽぽの冠毛終日雨に打たるる　渡辺幸江

春逝かん鎌の刃さきの黒蟻のその脹ら身のなめらかに過ぐ　斎藤詢子

氷割り釣る寒鮒は冬ごもりに耐へて鱗に血の滲むあり　小松武夫

産卵了へし鮭の軀の流れきて岩に挾まり凍りつきけり　三浦牧人

第一作、「夏草となりゆく原に」でなく、「なりゆく原か」であるところ、作者の姿が浮かび出てくる。走り梅雨のころで、まだ夏草になっていない原だが、作者の主観は夏のそれをまざまざと想起し、眼前の景に重ね合わす。第二作、鎌の刃先を歩んでいる蟻だから、「脹ら身」ということが印象されるのだが、作者は同時に、暑い夏がすぐそこに来ていることを思う。第三作、「冬ごもりに耐へて」は客観的にも承認される句だが、「冬ごもりに耐へて鱗に血の滲む」寒鮒には作者の主観があり、寒

鮒に強い共感を抱いている。第四作、克明な叙述は作者の受けた衝激を示す。形は嘔目風景の歌だが、作者には歌わずには済まされなかった一風景で、作者を柔く迎えるという自然ではない。主観的な語句は無いけれど、主観の強い歌としてここに入れた（産卵をウミ、冠毛をワタゲと読ませようとするのは悪い）。

以上の四首は、作者が歌の中に現われた例として挙げたが、その現われ方は隠微で、読者は容易に自分を作者と置き換えて歌の中の風景に見入ることができる。しかし

わが壮年過ぎゆくほどの寂しさに金雀枝の黄の散り初むるなり　　三枝　勅

はなやげる白き花芽のみつまたに年新たなる光は満ちぬ　　井坂照美

などいう歌はどうだろう。こういう歌は自然詠、また自然観照の歌とは言い得ないのかも知れない。むしろ純粋な抒情歌に分類すべきかも知れない。しかし第一作の作者は、金雀枝の黄花の散り初めるのを見据えているうちに、「わが壮年過ぎゆく」寂しさを見、そそられたのであって、その逆ではない。そこら辺が古今集流の見立て歌と区別されるところで、上下逆の構成になっているところなどむしろ万葉集の序詞のある歌に近い。こういう歌になると、読者は作者の姿を目の前に置き、それと同時に金雀枝の散り初めた景をも見ることになる。作者の姿は消せない。第二作も、「年初の喜び」を主題とする作である。だがこれも三極がしっかり凝視されていて、一首の力は、作者のそこに拠っている。

●動作を示す語句のあることで、作者が歌の中に現われる自然詠

縺れたる草引き行けば白々と蜥蜴の卵産み揃へあり　　森重縁秋

片栗の群れ咲くなだり下り来て小さき平は分教場跡　　今渊武昭

一人来て赤き漆の葉に対けば山の夕べの冷え深むなり　　三枝　勅

秋蟬の声澄む夕べすなほなるこころにひとり踏切を越ゆ　　深尾健一

第一作、読者は「縺れた草を引き行く」作者を意識し

た上で、作者と重なって「蜥蜴の卵」を見ることになる。ここに歌の中心がある。第二作、読者は作者になって、片栗の斜面を下って分教場跡に直面する。「片栗の群れ咲く傾斜地」の印象が強く働いている。第三作、この歌は、どうしても「一人」でなければならない。前二首より作者の姿態の印象が強いと言える。「冷え深む」は「冷え」（主語）が「深む」（述語）のである。第四作、いくぶん弱いのは、「秋蟬の声澄む夕べ」に力が無いからである。読者が作者のごとく踏切を越えるようには索引してくれない。そうではあるが、この分類に入れてもよい歌として選んだのである。

●労働と結んでとらえられた自然詠

上簇（じょうぞく）を終りて息つく作業場に雷雨の後の月淡く射す　　真下勇喜

草茂るまま休耕の吾が山田鋤（す）かんと来しに雷の雨降る　　山村茂人

山峡の春まだ浅き川ほとり焚火育てて麻剝（あさむ）き励む　　丸岡忠孝

春に接ぐりんごの穂木を埋め置かん根雪まぢかき土深く掘る　　小林雅明

これらの歌は、労働という実体があるから、瞭然と作者の姿が浮かび上がってくるのであるが、農業という労働が自然と密接であるため、歌われた自然も労働とつながった自然である。「雷雨の後の月」も「雷の雨」も「春まだ浅き川」も「根雪まぢかき土」も、労働から離れたそれではない。そこの辺が前項の自然とはかなり違っている。

その他農以外の労働とつながる自然詠も当然ある筈だが、いま適例が見当らなかった。農以外の労働者の場合でも、例えば林業とか漁業とか、特別に自然と密接にある職業者を除けば、それらの歌は、この歌と特に区別するところがなくなるのではあるまいか。農業の人のこうした自然詠は、その多くが同時に生活詠でもあって、万葉集の東歌のような歌の基盤たる健康性を保持し、その庶民性による親しみもあり、現代短歌の重要な一地位を占めてもいる。

ただ、私などが見ているに、こういうことがある。農業とか林業とか、その他、そういう職にある人が作歌に

入り、一時は注目すべき活動をした人でも、一応周辺の題材を歌いきると、そのあと別人のように歌の涸渇を訴える例が間々ある。さらに作歌を中止してもいく。もちろん、いま挙げてきたような世界は、交代した新しい人によって歌いつづけられて行くが、作歌の本人にとっては、それまで以上に出てゆく苦労はなかなかのものであるらしい。

それの原因はいろいろとあろうが、それにはこうした傾向の自然の歌は、いくつかの「事」と「自然」を結びつけると歌が容易に出来た、出来やすかったということもあろうか。つまり、涸渇や中止を避けて作歌を続け且つ自分の歌を高めてゆくためには、繰返して言うけれど、自然にむかう態度は冒頭に述べた白秋の愛情と驚きを、作歌の心構えは信夫の言う反省と努力をつねに持していたいものである。

これまでをここで整理してみると、投稿歌壇では（ここでは朝日歌壇のみを対象にした）、掲載レベルに達したもの、つまり発表されたものについて言えば、前項（四～五頁）の分類に当るものが圧倒的に多いようである。「主観的な語句」といった物差の吟味次第で多少変ってはきても、大方の趨勢は動かないだろう。それは、投稿歌壇は歌の鑑賞という作業に知識のややうすい、膨大な読者参加の世界であるということに拠ろう。しかし一方では、生活の重視といった、現代的感受を歌に盛りこみたいとする真面目な要求も、その趨勢にあずかっているのであろう。

「自然観」という言葉をこれまで用いてきたが、誤解をはばからずに言えば白秋が抱いていた一種の汎神論的（汎生命的）自然観や、斎藤茂吉の「自然自己一元の生」というような自然観は、いまどのような意に解されているだろうか、などとも思う。そこを疑えば、「自然観照」などいう語を用いて語ってみても、実は空しいのではないかという気がしないでもない。

ただ私自身は、自然詠の本格なものは、やはり自然観照という態度から生まれるものであろうし、ある文章で白秋が、自然観照に当っては小主観の感傷的な移入は避けるべきだと言った、その白秋の立言を基底にしたいと考えている者である。歌は短い律格詩だから、一口に言えば言葉は意味で調べが感情である。そこに言葉をもってする小主観の安易な移入を避けたいとするのが、白秋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com